勅命に二種あり

一楽　真

はじめに

大乗仏教は、苦しみからの解脱を自利利他円満として押さえてきた。それは、関係の中を生き、関係の中で苦しみ傷つけ合っている人間の姿を見た釈尊が、その在り方を悲しみ痛んだことに始まる。傷つけ合うことを仕方がないことと放っておくのであれば、釈尊は説法することもなかった。痛ましい在り方を見過ごすことができないからこそ、説法に立ち上がられたのである。その一例として、たとえば『大経』の善悪段（いわゆる三毒五悪段）では、貪欲、瞋恚、愚癡をもととして傷つけ合う世間の在り方について、諄々と説く釈尊の言葉を見ることができる。その全体が「痛み言うべからず。甚だ哀愍すべし。」[1]と呼びかけられている通りである。また善導の言葉では、「自損損他人」[2]と端的に語られている。この自損損他の在り方をどのように超え、自利利他をどのように成就するか、ここに大乗仏教の課題はある。しかも、いつでも、どこでも、誰の上においてもということが成り立たない限り、真実の大乗ということはできないのである。

親鸞が真実の仏道として掲げる「浄土真宗」も、当然のことながら、この課題を受け継いでいる。しかしながら、

親鸞は人間が自らの力によって自利利他を成就していくのではなく、阿弥陀如来の本願力の回向によって、自利利他が成就すると押さえる。それは親鸞自身の求道における苦闘が背景になっている。二十年にも及んだ比叡山での修学は、どれほど励んでも果たして仏道の行になっているのかという疑問を拭うことにはならなかった。師法然との出遇いの意味を、『教行信証』において「雑行を棄てて本願に帰す」[3]と記しているように、それまでの行を「雑行」と言い切っている。雑行とは、迷いを超える行ではなかったことが明確になったことを表している。人間がいかに真面目に多くの行に取り組んでも、有漏に有漏を重ねるだけなのである。

この意味で、「本願に帰す」とは、如来の本願を拠り所とするところに、真に迷いを超える道があることを示している。それは親鸞自身が出遇うことができた道であり、それ故に、迷いを超えることを求めるすべての人々に伝えることを親鸞は生涯の課題としたのである。

本小論では、如来の本願がどのように我々にはたらくのか、これを特に「勅命」という言葉から尋ねたい。「本願招喚の勅命」は「真実行」を顕かにする中で語られるが、如来が衆生を招き喚ぶ命令を意味している。一言で言えば、名号としてはたらく本願である。本願は言葉となって衆生に呼びかける。言葉となった本願が迷いの中にある衆生を呼び覚ますのである。この勅命が「信巻」の欲生釈においては、二種回向を語る『浄土論註』の文をもって確かめられている。その親鸞の意図を明らかにしたい。

一　『教行信証』における二回向

『一念多念文意』に次のような言葉がある。

「至心回向」というは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。

（『聖典』五三五頁）

親鸞が本願成就文の「至心回向」について、「至心に回向したまえり」あるいは「至心に回向せしめたまえり」と訓じて、如来の回向として読み切ったことは有名であるが、ここでは、阿弥陀如来の回向が「本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう」こととして明確に押さえられている。ただ、その回向については、往還の二種をもって語られてはいない。また、往相回向だと限定して語ることもしていない。親鸞にとっては、如来が本願の名号を十方の衆生に与えることが「回向」であると端的に示されているのである。ここでは、この「回向」が往相に当たるのか、還相に当たるのかという議論は不要だと思われる。往相と還相の二種回向を包んで「回向」と言われていると、まずは見当づけをしておきたい。十方の衆生に名号が与えられている事実が如来の回向であり、その内容として往相と還相の二種回向があると見るべきである。

これについては、『浄土三経往生文類』にも留意すべき言葉がある。

> 如来の二種の回向によりて、真実の信楽をうる人は、かならず正定聚のくらいに住するがゆえに、他力ともうすなり。
>
> （『聖典』四七一頁）

真実の信楽（信心）をうるのは、如来の二種回向によることが示されている。『教行信証』においては、「往相回向について真実の教行信証あり」と言われ、「教巻」から「証巻」までは、往相回向の内容が語られていると見ることができる。その観点からすれば、真実信心は往相回向に就いて語られており、往相回向によるものと解釈するのが当然であろう。ところが、右の「如来の二種の回向によりて、真実の信楽をうる」という言葉を踏まえれば、信心を得ること自体が二種回向の賜物と考えなければならない。

先の『一念多念文意』の文と今の『浄土三経往生文類』の文は、二種回向について考える際にどうしても踏まえておくべき言葉だと思われる。一見すると『教行信証』と和語聖教との間には齟齬があるように思われる。しかし、表現の違いはそれぞれの著作がもつ課題に異なりがあるからではなかろうか。今はその課題に立ち入ることはせずに、

まずは『教行信証』における二種回向の説示に注意して、その意味を探ることとしたい。

『教行信証』は「教巻」の冒頭に、

謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。

（『定本　教行信証』九頁）

と述べ、浄土真宗という仏道が往相と還相の二種回向によることを先ずもって掲げている。『教行信証』は親鸞が出遇うことのできた浄土真宗が真実の仏道であることを顕かにしている書物であるが、他からの批判や疑問に対して、経論釈をもって応答している文類である。もちろん、個別の名前を挙げて、一々弁明するという形はとっていない。なぜ浄土の教えでなければならないか。ただ念仏一つで救われるとはどのようなことか。その救いが大乗の仏道の目的である涅槃を証するものである。等々について、根本にまで遡って答えている。そのために、順序を踏まえて、浄土真宗という仏道を解き明かしていくという配慮が全編にわたって行き届いている。右に挙げた、冒頭の部分だけを読めば、回向の内容が理解できるというものではない。どうしても、後に出てくる言葉と照らし合わせて、ようやく意味内容を把握できるという書物である。その意味では、『教行信証』は難解と言うべきかもしれないが、それは読み手がすでに懐いている仏教に対する常識や先入観を取り払うために、必要かつ不可欠な方法であったと言える。

「教巻」の冒頭で、往相と還相という二回向について言葉は標掲されるものの、「回向」が何を意味するのか、何の説明も置かれていない。その内容について出てくるのは「行巻」をまたねばならない。「行巻」の本文は「謹んで往相の回向を按ずるに、大行あり、大信あり」[4]という言葉から始まる。真実行と真実信が不離であることを示すために、併せて「大信あり」と言われている。ただ、ここでも「回向」についての説明はまだなされない。それは後に引かれる天親の『浄土論』に託されている。

また曰わく、菩薩は四種の門に入りて自利の行成就したまえりと、知るべし、と。菩薩は第五門に出でて回向利

益他の行成就したまえりと、知るべし。菩薩はかくのごとく五門の行を修して、自利利他して、速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たまえるが故に、と。

（『定本　教行信証』三二頁）

これは『浄土論』が五念門の行の果である五功徳門について語る文章の一部である。ただ、『浄土論』では、善男子・善女人が五念門の行を修して菩薩となっていくと読める文章である。それを親鸞は「したまえり」という敬語を付すことによって、行ずる主体が阿弥陀如来（ないしは法蔵菩薩）であると読み取っている。もちろん、この一文だけで行の主体を決定することはできないが、少なくとも、回向ということが我々の積み上げていく実践項目ではないことを示そうとしている。

これを受けて、曇鸞の『浄土論註』の文を引用する中で、往相回向釈が出てくる。

いかんが回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまえり。回向に二種の相あり、一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功徳を以て一切衆生に回施して、作願して共に阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまえるなり、と。

（『定本　教行信証』三七頁）

ここに『浄土論』が語る「回向」に往相と還相の二種の相があることが初めて示され、往相についての曇鸞の解釈が挙げられている。その際に「往生せしめたまえるなり」と親鸞が読んでいることは、『浄土論』の場合と同様に注意しなければならない。普通に読めば、「己が功徳をもって一切衆生に回施して、作願して」は衆生（善男子・善女人）が主語となる。しかし、親鸞の読みによって、「己が功徳をもって一切衆生に回施して、作願」するのは、如来が主語となる。そのことがはっきりと示されるのは、後の名号釈である。南無阿弥陀仏についての善導の六字釈を踏まえて、親鸞は次のように述べている。

是を以て帰命は本願招喚の勅命なり。発願回向と言うは、如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心な

り。即是其行と言うは、即ち選択本願これなり。　（『定本　教行信証』四八頁）

善導の六字釈では「南無と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり」となっており、一見する限り、「帰命」も「発願回向」も衆生の行いである。ただ親鸞は、その根底にすでに如来のはたらきがあることを読み取ったのである。それ故に、「帰命は本願招喚の勅命なり」と述べ、衆生の帰命に先立って如来の本願の呼びかけがあると言う。また発願回向についても、「如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心なり」と述べ、衆生の発願回向ではないことが明示されるのである。

「行巻」の経論釈の引文を一つずつ丁寧に見る必要があるが、ここまで来て「回向」の主体が如来であることがようやく露わになってきたと言える。この後には中国（朝鮮を含む）十師の文と源信、そして法然の文を引用し、それを承けて大行についての一応の結びとして、親鸞は次のように述べる。

明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず。故に不回向の行と名づくるなり。大小聖人・重軽悪人、皆、同じく、斉しく選択大宝海に帰して、念仏成仏すべし。　（『定本　教行信証』六七頁）

「不回向」は師である法然が『選択集』において語っていることであるが、親鸞はそれを踏まえて、大行が「これ凡聖自力の行にあらず。故に不回向の行と名づくるなり」と述べている。ここには、仏道が如来の回向によって成り立つことを押さえ切ろうとする親鸞の意図が読みとれる。

ここを読んでいる限り、「回向」とあるのは直接には往相回向について語られていると見ることができる。そして還相回向については、「証巻」の後半に置かれる還相回向の解釈をまって出てくるというのが一般的な見方である。ただ、還相回向の釈は「証巻」に先立って「信巻」の欲生釈において往相の釈と合わせて引用されている。このことから、往相と還相は一応は二つに分けて語られるが、事実としては分けることができない面をもっていると考えた方が良いと思われる。欲生釈の内容をすぐに尋ねたいところであるが、その前に、そもそも回向が二つに分けられたの

は何故か。それを曇鸞の『浄土論註』を通して、確かめておきたい。

二　二回向が立てられる意義

以前にも述べたことがあるので詳細は譲るが[5]、曇鸞の『浄土論註』は、阿弥陀仏の浄土に願生するところに、誰の上においても迷いを超えて涅槃に至る仏道を明らかにする課題を有している。それは曇鸞自身の求道の到達点でもあった。もちろん、曇鸞の個人的な資質というような問題ではなく、菩薩道そのものの行じ難さの問題であった。それ故に、曇鸞はインドの龍樹に遡り、その課題を継承して天親の『浄土論』を註解したのである。龍樹も天親も、ともに阿弥陀仏の浄土を願生した人であることを確かめ、菩薩道の課題の満足も、浄土の仏道において果たされることを掲げていったのである。

しかしながら、曇鸞もかつては学んでいたが、四論を学ぶ者などにとっては、西方浄土や浄土往生という考え方は、実体的な他世界を想起させ、衆生を導くための方便としては許容できたとしても、決して真実の仏道とは見なすわけにはいかないという問題があった。それ故、『浄土論註』においては、そのような批判に応答する問答を設けて、浄土往生の意義を確かめようとする箇所がいくつも見られる。誰かに問われたという以前に、曇鸞自身が十分に予見できる批判であったと思われる。一例を挙げるならば、「行巻」に引かれる次の文にも読み取ることができる。

願生安楽国は、この一句はこれ作願門なり、天親菩薩帰命の意なり。乃至　問うて曰わく、大乗経論の中に処処に「衆生、畢竟無生にして虚空のごとし」と説きたまえり。いかんぞ天親菩薩、願生と言うや。

（『真宗聖教全書』一・二八三頁）

ここに、天親菩薩が阿弥陀の浄土に願生するのは、大乗の経論に説くところと矛盾するのではないか、という問いが出されている。いかに浄土が実体的に捉えられていたか、また願生が迷いを延長することと見なされていたかが知ら

れる。それに対して、曇鸞は次のように答える。

答えて曰わく、「衆生無生にして虚空のごとし」と説くに、二種あり。一つには、凡夫の実の衆生と謂うところのごとく、凡夫の所見の実の生死のごとし。この所見の事、畢竟じて有らゆることなけん、亀毛のごとし、虚空のごとしと。二つには、いわく、諸法は因縁生のゆえに、すなわちこれ不生にして有らゆることなきこと、虚空のごとしと。天親菩薩、願生するところはこれ因縁の義なり。因縁の義なるがゆえに、仮に生と名づく。凡夫の、実の衆生・実の生死ありと謂うがごときにはあらざるなり。

（同右）

「生」と言っても、凡夫が思うような実体的なものではなく、「因縁の義」によって「仮に生と名づく」と押さえられている。曇鸞がどれほど苦労して、浄土の仏道を顕示しようとしていたかがうかがわれる。決して他世界に逃げ込むために浄土往生を願うのではない。「仮に生と名づく」とまで言わねばならない課題があるのである。もし、浄土がこの世の問題からの逃避を期待するものであるならば、どれほど切実であっても仏道とはなり得ない。浄土往生は、この世の現実と没交渉になるのみである。傷つけ合うことをどこで超えるかという自利利他の課題を踏まえるならば、浄土の仏道もそれに応えるものでなければならない。その意味で、曇鸞における浄土の仏道の顕示は、真実に自利利他円満ということが成立するためであったと言えよう。曇鸞自身が求めて得られなかった成仏道が、天親によって願生浄土として教えられていたのである。

これについて曇鸞は、『論註』の末尾の「覈求其本釈」と呼ばれる一段で、大乗菩薩道の課題をも満足することを確かめている。今、注意したいのは、自利利他の成就が阿弥陀如来によるということを述べた後に、第十八願、第十一願、第二十二願の三つの願を挙げて、「速得」の証明としている部分である。

三願の内容について要言すれば、「仏願力に縁るが故に」以下の三つことが「速得」の「証」として述べられる。

一つには第十八願を挙げて、

仏願力に縁るが故に十念す、念仏すればすなわち往生を得む。往生を得るが故に、即ち三界輪転の事を勉る。輪転なきが故に、このゆえに速を得ること、一の証なり。

（『真宗聖教全書』一・三四七頁）

二つには第十一願を挙げて、

仏願力に縁るが故に、正定聚に住す。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至って、もろもろの回伏の難なし、このゆえに速を得る、二の証なり。

（同右）

そして、三つには第二十二願を挙げて、

仏願力に縁るが故に、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せむ。常倫に超出し諸地の行を以ての故に、このゆえに速を得る、三の証なり。

（同右）

と押さえられている。

念仏して往生を得て必ず滅度に至る、という点が一つ目と二つ目で理解できる。これだけでも、浄土の仏道を涅槃に到る道として掲げる重要な意味をもっている。しかし、それに加えて三つ目が大切である。「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せむ」というのは、浄土に往生する方向に対して、この世に向かうものであり、二つは簡単に結びつかないのではなかろうか。曇鸞は明確に、「必至滅度」に加えて、「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せむ」という方向性を確かめている。つまり、浄土に往生するとは、この世を去って浄土に生まれるという方向だけでなく、「常倫に超出」という方向をもっていることを明らかに示しているのである。もちろん、これは『大無量寿経』自身がすでに語っていることではあるが、特にこの願に注目して取り上げたのは曇鸞の仕事である。

阿弥陀仏の浄土は、どこまでもこの世の問題に応答している。『大経』において法蔵菩薩の発願について説かれる箇所でも、「我、世において速やかに正覚を成らしめて、もろもろの生死勤苦の本を抜かしめん」[6]とある。法蔵の願いはこの世を去った別世界の話ではなく、「世において」のことである。しかも、「生死勤苦の本」とあるように、

一々の苦しみを個別に抜くのではなく、一々の苦しみの根本を抜くためのものである。曇鸞が浄土往生について、涅槃に到るという方向のみでなく、「常倫に超出」という方向を見たのは、この経の精神を受け取った結果と言える。

この曇鸞の文章を親鸞は「行巻」の他力について釈するところに引用している。また、本当の意味での「利他」を明らかにしているという意味で「他利利他の深義」とも呼んでいる。[7]「行巻」において仏願力のはたらきを確かめる中で、本願力によって衆生に与えられる利益がすでに語られていることが注意される。中でも、「証巻」において詳説される「必至滅度の願」と「還相回向の願」が、「証巻」に先立ってここに挙げられていることに留意しなければならない。また「三願を取りて的しく、以て義の意を証せん」と読まれていることも大事である。「的」の字は一般的には「あきらかに」あるいは「たしかに」という意味である。そこに親鸞は「ひとしく」という訓を付すことによって、三願の内容を段階的にではなく、一つの事実として捉えようとしていると思われる。結論的に言うならば、親鸞にとって第十八願が語る念仏往生には、「必至滅度」と「還相回向」の二つの利益が同時のこととして受けとめられていると考えなければならない。もし、往相と還相の二回向が時間を異にする出来事であるならば、ここに還相回向の願までを引く必要はないはずである。

先にも述べたが、事実としては一つのことが、説明をする際には順序立てねばならないこともある。ただ、順序立てて語られたことを段階的に捉えたり、時間的前後をつけて見たりすることは、事実が一つであることを見誤る危険性がある。往相と還相の二回向については、これまで段階的に分けて見ることが多くなされてきたのではなかろうか。そう考えると、親鸞が「行巻」において、すでに還相回向に関わる内容を説示していることが改めて注意される。代表的な部分を一箇所のみ挙げておきたい。

しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知るべしと。　（『定本　教行信証』七〇頁）

大行の利益を端的に語る親鸞の言葉である。ここにも「普賢の徳に遵うなり」という言葉が置かれている。往相回向についての真実の教行信証を述べるということに限るのであれば、ここに還相回向に関わることを挙げる必要はないであろう。しかし、往相回向の利益と還相回向の利益は切り離すことはできない故に、ここに併せて述べているのである。

以上のような視点に立つとき、「信巻」欲生釈における往相・還相の文がどのように見えてくるか。両方をまとめて引用する親鸞の意図は何か。次にそれを尋ねたい。

三　勅命に二種あり

再度、『教行信証』における二回向の文の配置について確認しておきたい。

「教巻」　往相・還相の二回向について標掲
「行巻」　『浄土論』の回向門および『論註』往相回向の文
「信巻」　「欲生釈」に『論註』往相・還相の二回向の文
「証巻」　還相回向釈

「教巻」において掲げられた二回向の中、往相回向については「行巻」に、還相回向については「証巻」に置かれている。そして両者をつなぐように「信巻」において二つの文が引用される。ちなみに、「真仏土巻」「化身土巻」には「往相」「還相」の語は全く出ない。とすると、回向の中心は「信巻」の「欲生釈」に見るべきであり、それを解釈する際には、「行巻」と「証巻」に分けて述べられるという見当づけができるのではなかろうか。

まずは、「信巻」の課題を大まかに見ておきたい。教行証の三法によって表現される仏道の体系において、「教行信証」という四法は異例と言える。特に、信心を仏道の歩みの前提と考える立場からすれば、教行の次に信が置かれる

という順序そのものが、何を意味するか理解できないかもしれない。「信巻」に改めて「序」を置き、一般的な信心と区別して真実の信心を顕かにしようとする親鸞が直面していた現状がうかがえる。たとえば、仏の教えを信じて仏道を歩むと言ってみても、本当に仏の教えに出会ったのかが大問題である。自分の思い描いたものを信じているだけかもしれない。また、仏道を歩むと言っても、退転の危険性をいつも孕んでいる。その意味で、何を以て仏教を信ずると言えるのか、また何が仏道であることを確保するのかということがどうしても問い直される必要があったのである。「信巻」は、自明とされてきた信心を改めて問い、真実の仏道を顕揚するという課題を有している。その時に、仏道の歩みを成り立たせる信心は、自らが起こすようなものではなく、如来の本願力回向によるということを確かめるのが、三心一心の問答である。如来の回向によって成り立つが故に、誰においても平等であり、必ず涅槃に至り得るのである。

三心一心の問答は、『大経』が説く第十八願「至心信楽欲生我国」の語に注目し、衆生に発起する一心の内実を至心・信楽・欲生の三心を以て確かめるものである。信心を三つの面から押さえるに当たっては、曇鸞における三不信（不淳、不一、不相続）および善導の三心釈（至誠心、深心、回向発願心）を引用し、信心が有する課題を確かめている。いま丁寧に見ることはできないが、課題は大きく言って「如実修行」と「金剛心」の二点に集約できると思う。「如実修行」は、真に仏道たり得ているかという問題であり、「金剛心」はその歩みが煩悩の只中においても保持されるかという問題である。特に「金剛心」という言葉は「信巻」には随所に出てくるキーワードになっている。冒頭の序では、「金剛の真信」[8]と言われ、三心一心問答を結ぶ箇所においても、「一心すなわち金剛真心の義、答え竟りぬ」[9]と述べられている。また「真仏弟子」についても「金剛心の行人」[10]と端的に押さえられ、さらに弥勒菩薩の「等覚金剛心」を引き合いにまで出して、念仏の衆生が「大般涅槃を超証す」[11]として真実の仏道が掲げられている。言わば、単に到着点としての涅槃が語られるだけでなく、現実の人生が仏道たり得るかという課題が「金剛心」を通して

語られている。

親鸞は三心一心の問答において、衆生に発起する一心の根拠に如来の願心があることを確かめている。換言すれば、如来の願心が衆生に回施され、衆生の信心にまでなっていると言うのである。そこには、如来の願心の回施なくしては迷いを超え出る可能性が全くない衆生の現実が見据えられている。その衆生を救い遂げようとする願心は、欲生を源として、名号の呼びかけにまで具体化している。言わば、名号の呼びかけを因位の法蔵菩薩の願心に遡って尋ねているのが、至心・信楽・欲生の三心についての親鸞の解釈である。

第十八願において、如来は「我が国に生まれんと欲え」と呼びかける。親鸞はこれを、

欲生と言うは、則ちこれ、如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。（『定本　教行信証』一二七頁）

と述べている。「行巻」の名号釈で言われていた「本願招喚の勅命」と重ねて受けとめられている。親鸞においては「帰命」と「欲生」とは、ともに如来が衆生を招き喚ぶ勅命であることが分かる。この招喚の勅命である「欲生」を、親鸞は端的に「回向心」[12]と押さえている。如来の回向は、衆生を招き喚ぶ声としてあるのである。招き喚ぶ声は、その声が届いたところにのみ存在する。聞こえた者のみに存在すると言って良い。本願成就文で言えば、「聞其名号」の主題であり、また「唯除五逆誹謗正法」につながる問題である。ただ、今はそれについて論じない。

ここで取り上げねばならないのは、この欲生の願心を尋ねる中で、二回向を語る『論註』の文が引用されていることである。次の通りである。

『浄土論』に曰わく、「云何が回向したまえる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故に」とのたまえり。回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功徳を以て一切衆生に回施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまうなり。還相は、彼の土に生じ已わりて、奢摩他・毘婆舎那・方便力成就することを得て、生死の

稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向えしめたまうなり。もしは往・もしは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんがためにとのたまえり。この故に回向為首得成就大悲心故と言えりと。已上

（『定本　教行信証』一二八頁）

『浄土論』の回向についての文章とその解釈である『論註』の言葉が続けて引かれている。まずは「一切苦悩の衆生を捨てず」救い遂げようとする如来利他の願心が示されている。その如来の利他である回向が往相と還相という二種の相を取るのである。換言すれば、二種の相を取らなければ、衆生を救い遂げることにならないのである。「回向に二種の相あり」とは、如来の回向が衆生にはたらく時に二つのはたらき方をするということである。前節で述べたことをまとめるならば、衆生にとっては「必至滅度」と「超出常倫」の二方向が利益として与えられるのである。この二つが念仏往生の内容としてすでに「行巻」の三願的証で押さえられていた。念仏往生は一面から言えば、迷いを離れて滅度に至るという方向をもっている。しかし、同時に常倫に超出するという方向も具えているのである。

「我が国に生まれんと欲え」という招喚の声は、一応は穢土を離れて浄土に生まれよという呼び声である。しかし、それは決して穢土から逃げ出し、穢土と没交渉になることを勧めるものではない。かえって穢土の只中で仏道を行ずる道を開こうとしている。「浄土に生まれよ」という勅命は「穢土に超出せよ」という勅命でもある。欲生釈に往還二回向の文が引かれるのは、勅命に二方向があるということを示そうとする親鸞の意図があると読み取るべきではなかろうか。その二方向をあえて一言で言うならば、「世を超えて世を生きよ」である。ここに浄土の教えがこの世での生き方に深く関わっていることが見えてくる。[13]

この後に、引用される善導の文には、「この心、深く信ぜること、金剛のごとくなるに由って、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず」[14]ということが言われる。二河白道の譬喩にも説かれるように、我々の生きる現実は貪愛・瞋憎が渦巻き続けている。そのような現実を生きる者に、仏道を開いてくるのが如来の二

回向である。具体的には、南無阿弥陀仏の名号を通して、如来の二種の勅命を聞き続けるところに、退転することのない仏道が成り立つのである。そして、名号の招き喚ぶ声を聞くのは、今、ここ、である。穢土の真っ只中において聞くのである。

世を超えるという課題と、世に生きるという課題、これは順を追って語る際には分けて示すほかない。しかし、歩みの事実としては分けられないし、分けてはならない。その意味で、往相回向の利益と還相回向の利益は同時と言わねばならない。最後に、それを語る和讃を挙げておきたい。

南無阿弥陀仏の回向の　恩徳広大不思議にて
往相回向の利益には　還相回向に回入せり

（『正像末和讃』聖典五〇四頁）

おわりに

「欲生釈」に往還二回向の文が引かれる意味を、勅命に二種ありという視点から尋ねてきた。大雑把な考察ではあるが、往相還相の二回向をどう考えるかの筋道をつけたいという意図は果たせたように思う。残された課題は多いが、その中で浄土について一言しておきたい。親鸞が語る浄土は、天親・曇鸞が明らかにした「荘厳功徳」としての浄土を基本に据えている。死後の世界であるとか、実体的な他世界とはおよそ一線を画している。その意味で、二回向のはたらきを明確にすることは、浄土がどのように我々にはたらきかけてくるかを明らかにすることにもつながっている。この点をふまえて、浄土往生ということがこの世の問題といかに関わるかを考察していく必要性をより一層感じている。これについては機会を改めて論じたい。

凡例

引用は、『教行信証』については『定本　教行信証』、それ以外のものについては『真宗聖典』および『真宗聖教全書』によった。漢文は書き下しに改め、適宜、句読点を補った。また、旧漢字は現行の通行体に改めた。

註

（1）『仏説無量寿経』聖典六二頁
（2）『般舟讃』真宗聖教全書一・六八五頁
（3）『定本　教行信証』三八一頁
（4）『定本　教行信証』一七頁
（5）拙稿「生活の根拠としての願生」（『親鸞教学』第七十七号）、「如来二種の回向」（『親鸞教学』第六十二号）など。
（6）『仏説無量寿経』聖典一三頁
（7）「証巻」（『定本　教行信証』二二三頁）。これについては拙著『『入出二門偈頌文』聞記』四一頁（東本願寺出版部）において少しく考察を加えたので参照されたい。
（8）『定本　教行信証』九五頁
（9）『定本　教行信証』一四〇頁
（10）『定本　教行信証』一四四頁
（11）『定本　教行信証』一五一頁
（12）「欲生即ちこれ回向心なり」（『定本　教行信証』一二七頁）
（13）これについては、拙稿「浄土と現世」（『親鸞教学』一〇〇号）を参照されたい。
（14）『定本　教行信証』一三〇頁